

2012年7月3日(火)

東奥日報

特集

■ スクランブル

[INDEX▶](#)

▶ アフガンに豊かな小麦畑を／半世紀前の種が「帰郷」

半世紀前にアフガニスタンから持ち帰り、横浜市立大の木原生物学研究所(横浜市戸塚区)が保存していた小麦の種を“帰郷”させて、戦争と干ばつで荒廃した土地に豊かな小麦畑をよみがえらせようというプロジェクトが進んでいる。現地の試験場で栽培されている小麦は黄金色に実り、この夏、初めての収穫の季節を迎えた。

同研究所は約6千種の小麦の種をマイナス約20度で保存する設備を持つ、国内有数の種子バンクだ。「保存状態が良ければ100年前のものでも芽が出る。種はまさにタイムカプセルなんです」。横浜市立大の坂智広(ばん・ともひろ)教授(植物遺伝育種学)はそう話す。

今回のプロジェクトは、国際協力機構(JICA)などが開発途上国と協力して地球規模の問題に取り組むプログラムの一つで、坂教授らが2011年にスタートした。

使用した種は1955年、研究所の創設者で遺伝学者の故木原均(きはら・ひとし)博士が、小麦の祖先を探るために訪れたアフガンから持ち帰った。その後、代々の研究者が約10年ごとに小麦に育てて種子を採取し保存してきた。

プロジェクトは、現地に自生していた種の厳しい気象条件に強い遺伝子と、収穫量の多い近代種をかけ合わせ、最も適した品種を作り出すことを目指す。

首都カブール市内の二つの試験場計約800平方メートルで栽培されている小麦は約360種。昨年11月に種まきし、「根が長く水分をよく吸う」「実が多い」「病気に強い」などの遺伝子の特徴をデータ化し、品種改良に役立てる。今年6月末に初めての収穫を始め、今後は栽培地域を広げていく計画だ。

社会主義体制だったアフガンは近代的な農業が発展していたが、長年の戦争と干ばつで土地は荒れた。農業施設は反政府武装勢力タリバンなどに破壊され、多くの知識人は亡命した。

「先進国の多くは、雨が多い一部地域に収穫率の高い品種を植えるだけの安易な援助を繰り返してきた」と坂教授。「農家の人に高級外車を買って与えるのではなく、リヤカーの使い方を一緒に考えていくことが大切」と力を込める。

横浜市立大では現地の研究生を受け入れ、次世代を担う農業指導者の育成にも取り組む。援助が終わった後も、現地の人自力で栽培を続けていける形が目標だ。

坂教授は「品種改良には10年、普及まで5年と言われる。目に見える成果がすぐに出なくても、50年後、100年後の未来を変えられるかもしれない」と意気込んでいる。